

文化

大国主導の構図に批判

サミット機に広島で「つどい」

1975年の第1回以来、半世紀近い歴史を刻む先進国首脳会議(サミット)は、それぞれの開催地で歓迎とともに抗議活動にも直面してきた。とりわけ冷戦終結以降、グローバル(地球大)な課題を大国のリーダーシップで「解決」しようとする構図自体に疑問を投げ、批判する動きが目立つという。先進7

カ国(G7)サミットを迎える広島でも、そうした視点での論議は続いている。広島市中区で13日にあった実行委員会主催の「G7広島サミットを問う市民のつどい」はその一つ。司会者は冒頭で、G7に米国や英国、フランスが含まれることなどを踏まえ「核保有国に広島へ来る資格はない」と

多様な論点で根本的異議

高まる市民の発信力映す

「自然界と人類の持続可能な共存には浪費型文明を見直し、社会変革を進めるしかない。しかし、生物多様性条約を批准しない米国をはじめ、G7にその視点はない」と批判したのは、瀬戸内海の環境問題にも詳しいNPO法人ピースデポ代表の湯浅一郎さん。核廃絶に寄与し得るのかを軸に、さまざまな論点でサミットへの根本的な異議が表明された。

端的に述べた。

「サミットはなぜいらぬのか」の題で報告に立った富山大名誉教授の小倉利丸さんは「サミットは、それぞれの政権維持を目的とする参加国の『情報戦』の場。声明の美辞麗句を真に受けて、検証する姿勢が欠かせない」と訴えた。元那覇市議の高里鈴代さんは、日本では初めて東京以外での開催となったG8沖縄サミット(2000年)時の経験に触れ、「当時のクリントン米大統領の決意表明に反し、在沖米軍の基地機能は強化されている。サミットはリップサービスの舞台になった」と指摘した。

「サミットを受け入れる人、利用する人、疑問を呈する人、反対する人」。さまざまな立場からの発信がときに交錯しながら、問題の解決へ言論空間を成熟させることに期待したい」と話した。

さまざまな論点でG7サミット開催を批判した市民のつどい



ヒロシマ過去・未来 若手のまなざし 広島でアート展

19日開幕する先進7カ国首脳会議(G7サミット)に合わせ、原爆や平和をテーマとしたアート展が、広島市中区のそごう広島店で開かれている。写真。国内外の若手作家4人が、ヒロシマの過去と未来を見つめ直す。

「Take it Home」展。同店本館2階の一角に計12点を展示する。廿日市出身でキュレーターとしても活動する半田颯哉さんが企画した。手製のデジタル時計を用いた半田さん

のシリーズは、原爆投下時刻から現在までの経過時間を示す。

「核が廃絶されるまで広島は戦後は終わらない」と思いを込める。

コンゴ在住のシクステ・カキンダさんは映像作品。原爆投下までの流れをアニメーションで「逆再生」し、米国の原爆開発にコンゴ産のウランが使われた歴史を浮かび上がらせる。プリンターを使ったインスタレーションを展開したのは、日本被団



協の代表委員だった故伊東壮さんを祖父にもつ伊東慧さん。「次の犠牲者は誰」などと書いた英文が定期的に印刷される。

世界初の核実験を題材とした山本れいらさんの絵画作品なども並ぶ。展示は22日まで。

(福田彩乃)

(道面雅重)